

一年分、冷えている

その娘は、ハコと名乗った。本名かどうかわからない。十七だと、訊かれもしないのに年をいったが、それも本当かはわからなかった。

低気圧が通過した直後で、海はメロンソーダにミルクを足したような色をしていた。他の浜では決してこうはならない。底荒れして砂を巻きあげているのだ。この浜の砂はまっ白だった。トンネルひとつくぐると、海はコーヒー色をしている。

キムは、そのミルク入りメロンソーダの上を漂っているサーファーをぼんやりと見つめていたのだった。腰をかけたガードレールのへりが、ジーンズのヒップポケットにひっか

かっている。

サーファーたちの少し手前では、イケスのブイを囲むように海鳥が群れをなして浮かんでいた。

波に乗ろうと必死にパドリングをくり返す、ウェットスーツの群れを小馬鹿にしたように眺めている。飽きるとクチバシを水面につっこんで小魚をあさるのだった。次から次にくる波の動きとは関係なく、上手に自分の定位置を維持している。

「やんないの？」

そう話しかけて隣りにすわった娘を、キムはしばらく無視していた。娘は怒った様子もなく、Tシャツの上に着こんだアロハの胸からショートホープの箱をとりだして一本くわえた。

キムは初めてそこで娘をじっと見つめた。赤茶けた髪はひどく傷んでいた。さほど陽にやけてはいないが、アロハも膝のすぐ上が破れたジーンズも年が入っている。

「珍しいの吸ってるな。男のか？」

娘は首を振った。

「あたしのだよ。吸う？」

キムは答えず、娘のアロハの胸を見つめた。やがて短く、

「いらん」

と、海に目を戻した。

「やんないの、あんた？」

それに対しても娘は気を悪くした様子は見せなかった。

「俺はサーファーじゃない」

「そう。焼けてるし、髪赤いから、そうかと思った」

キムは娘を再び見た。今度はわずかの間だけだった。

「あたしハコ。十七」

「そうか。よろしくな」

海鳥を見つめ、キムはうっとりといった。頭上で鳶とびが甲高い鳴き声を響かせた。

それぎり二人はしばらく何もいわなかった。ハコの唇をもれる煙を海から吹く風が奪いとっていく。

やがてハコが短くなつた煙草をスニーカーの裏に押しつけた。

「車で来たの？」

「ああ」

「ひとりで？」

キムは無言で頷うなずいた。

「東京？」

「そうだ」

「乗ってって。帰るとき」

「今日は帰らん」

「いいよ」

低い声でハコがいった。キムはハコを見た。大きい目が光っていた。意気こんでいるのでも、投げているのでもなかった。淡々として、しかし目の底に光があった。

「喧嘩けんかしたのか」

キムは砂浜の焚たき火で暖をとるウェットスーツの群むれに顎あごをしゃくった。

「するような奴、いない」

「どうして来た？」

「別に。ただ気が向いたから来たんだよ。男って馬鹿だね。日がないちにち、飽きもしないで。それを見る女も馬鹿だけど」

キムの口もとに笑みが浮かんだ。風がもう少し強まれば吹きとんでしまいうそなほどかすかな笑みだった。

西陽が、浜に刺さったボードの影を長くのばしていた。

キムは腰をあげた。

「よいしょ」

それを見て、ハコがガードレールをすべりおりた。海辺のくねくねとした片側一車線の道をキムは横断した。漁港の町を走る車は、皆とばしている。

夏の間だけ開くドライブインの、ロープを渡した駐車場にXJ-Sが駐まっていた。ロープを渡す柱は、一時間前、キムが蹴り倒したまま転がっている。

小豆色あずきのジャガーを見て、ハコは一瞬立ち止まった。

「あんたの？」

「兄貴のだ」

「そう……。お兄さん、お金持なんだね」

キムは応えず車のロックを解いた。ハコがするりと助手席に乗りこんだ。

ジャガーを道に出すと、キムは再びロープの柱を立てた。

海沿いの道を走りだした。

ハコは無言でフロントガラスの向こうを見つめていた。キムも話しかけようとしな

しばらく走ると、道は海から離れた。小高い丘が海への視線をさえぎり、湿ったトンネルがいくつもつづいた。

いくつめかのトンネルを過ぎたとき、キムはハンドルを左に切った。以前は畑だった、湿地帯を抜ける細い道だった。

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。